

随筆



グジャラート生きもの紀行 その1 動物編

石川 照之

1. はじめに

縁あって2013年5月、KYBグループ初のインド進出拠点、KYB-Conmat Pvt. Ltd.(以下KCPL)のスタートから赴任、丸3年になる。私を含め当初の日本人駐在員4人のうち、2015年に3人が帰任、2人が着任して現在は3人である。KCPLの概要については技報No. 49、また生産品目のミキサ開発はNo. 47で紹介されている。

本報ではKCPLのある西インド、グジャラート州バドダラ市とその周辺の生きものについて動物編と鳥類編の2回に分けて紹介したい。

2. 動物

それでは、バドダラ市で見掛ける動物を紹介しよう。

2.1 ウシとスイギュウ

さて、インドの動物と言えはまずは牛である。人口12億6千人の国に約2億頭の牛、1億頭の水牛がいる。

インドの人口約80%が信仰しているヒンドゥー教の神様、シヴァ神の乗り物で神聖な生き物とされている。背中にコブのある牛で、耳が大きく垂れている。首の下や腹に皮膚の弛んだカーテンみたいなヒダがある。



写真1 コブ牛(ゼブ牛)

神聖な牛なので食べるなどもっての外だが、乳を搾るのは構わなくて、大多数がベジタリアンのインドでは重要な動物性タンパク質や脂肪分の補給源になっている。使役に使うのも構わない。

立派な角の牡牛が2頭並んで角を振りながら曳く牛車は勇ましくて格好良い。鋤すきを引いて畑を耕しているのも良く見かける。なお、ほとんどの牡牛は去勢されている。



写真2 牛車を曳く牡牛

街中の牛はゴミを漁っている牛が多い。托鉢たくはつよろしく民家の前で餌を貰えるまで待っている牛もいる。正に牛歩でのろのろ歩いたり、車道に寝そべっているのにも出くわす。交通渋滞を引き起そうが我関せずお構いなし、好きなように暮らしている(ように見える)。オレ様は神様の使い、インド人常套句の「No Problem」の体である。すぐ脇を車やバイクが結構なスピードで過ぎてても悠然としている。脚や尻尾を轆かれそうだけれど、肝が据わっているのか、視力が弱くて見えていないのか、ただ鈍感なだけなのかよく分からない。車で走っていると邪魔な牛にも出くわすが、追越し車線を牛のように動かない車、並進しながら大声で話に夢中のスクーター女性。何千年、牛と一緒に暮らしていると牛に似たのかもしれない。もっとも、退かない車も困るが、運転手の蹴散らす様に鳴らすクラクション、パッシ

ングの嵐も閉口ではある。

一方、牛と一緒に水牛もたくさんいる。体は黒く牛に比べ頭が小さい。角の断面は少し扁平に見える。牛と一緒に使役にも使われ、乳を搾られている。

水牛の乳のほうがより脂肪分が多く乳量も多い。神様の使いの牛より人には役立っている。インド最大の乳業会社（酪農組合）Amulの工場がバドグラ市にもある。集配トラックに描かれているのは水牛だ。この水牛の牛乳は「ゴールド」の名が付され少し高い。思い巡らすと道端でゴミを漁っている牛の乳がこの会社の乳製品にも使われているかもしれない。そう思うとちょっと引けるが割切らないと、この国では暮らしていけない。



写真3 水浴びする水牛

街中や道沿い、行列を作って歩いているのを見ると、牛が先頭、水牛は後ろが多い。牛の世界でもカーストがあるのかもしれない。その行列の脇の立木には牛の食害防止に金網の柵があったりする。肝心の立木は成長不良で雑草のほうが元気だったりもするが、乾燥地帯のグジャラート、道端の野生の灌木の多くは、牛や動物に捕食されないよう長い刺が生えている。

水牛は牛の仲間でありながら運が悪い。崇められる牛と違い、悪魔の化身で死者の王の乗り物とされ末は食肉にもなる。インドは世界最大の牛肉輸出国で、実は水牛の肉である。味のほうはお世辞にも美味とは言い難い。硬く筋張って旨味も少ない。肉牛として飼われる牛は殆どなく、搾乳、使役ができなくなった牛が食肉化されるので無理もないところがある。

ところで、辺りかまわず落として行く牛糞は人に回収され薄く延ばして天日干し、伝統的な燃料にされている。道路の中央分離帯に並べて干してあったりする。リサイクル社会である。

2.2 イヌ

バドグラ市の街では辻々、そこいら中で見かける。

暑い国なので短毛で猟犬のようにスマートな犬が多い。尻尾が「の」の字に巻いているのが多い。たいがい、コンクリートや砂の上に寝そべって昼寝をしている。もちろん野良である。数匹ずつのグループを作っていて、我々の住んでいるアパートのある区域でも6～7匹は定住している。街角にゴミ捨て場があり収集用の大きな鉄箱もあるのだが、牛と一緒にゴミを漁って辺り一杯に散らかしている。野良とは言っても結構餌を与えられている。帯同している家人もその一人で、アパートの前を歩くとお気に入りの犬が寄ってくる。しかし不思議と餌をせがんでじゃれ付いて来るまではない。狂犬病保菌の危険のあるインド、用心はしないとイケない。



写真4 アパート前の犬とオートリキシャ

ちなみに、ゴミ捨て場の衛生はある程度気にしているようで、消毒用に石灰が撒かれていることも多い。また、蚊の駆除にトラックの荷台に付けたブローワから煙幕のように殺虫剤を散布して回る。ほとんど臭くないが子供が煙を追いかけて遊ぶのは体に悪そうだ。

2.3 リス

インドシマヤシリスと言う種類で、こちらも神様ゆかりの動物である。危害を加えられないので、住宅地でも公園でもどこにでもいる。「キチキチキチ



写真5 サヤジ・パウグ公園のシマヤシリス

キチキチキチ」尻尾を振りながら鳴くのだが、初めは何が鳴いているのか分からなかった。両手で餌を食べる仕草は可愛い。

2.4 ヤギ, ヒツジ

KCPLは畑に囲まれていて、時折羊飼いが入って草を食ませている。ヤギの方が多し。ヒツジが混じっていることもある。たいがい羊は埃まみれでホコリ玉だ。ヤギは搾乳、ヒツジは羊毛採取が目的。あとはマトンとなる。インドの食肉は家禽がトップだが次はマトン、ヤギもヒツジもマトンと称している。



写真6 KCPL脇の水路沿いを歩く羊・山羊

2.5 ロバ

ロバは哀しい。いつも俯^{うつむ}いている。用もなく道端や中央分離帯の上に突っ立っていたりする。同じ路上にいて交通の邪魔になっても、牛の存在感、オレサマ感^{さいな}は無い。馬の整った容姿に比べ、小さな体に大きな頭に長い鼻、大きな耳、劣等感に苛まれて自棄になっているようにも見える。おまけにたてがみをピンクに染められているものまでいる。そうは言っても持ち主はおり、尻にいろいろなマクの焼き印が押されている。何を目的に飼われているのだろう。振分け荷物を背負って働いているのはまだ3回しか見たことがない。世間には苛^{いじ}められやすいタ



写真7 グジャラートの世界遺産チャンパネールのパヴァガドゥ山上のロバ

イブの人がいて、ロバを見ていると同じタイプに見えてしまう。私の誤解であって欲しい。

2.6 ラクダ

インドに来るまで、何度見たことがあったろうか。憶えていないけれど動物園で数回、鳥取砂丘で見たのが最後だ。「駱駝車」とは聞かないが、ここでは大きな荷車を曳いている。脇を通ると背が高いのに驚く。顔をアップすると鼻の下が長く丸みを帯びている。昔見た映画「ネバーエンディングストーリー」のラッキードラゴンを思い出した。駱駝の顔がモチーフかもしれない。



写真8 放牧に向かうラクダ

2.7 ウマ

街中でいろいろな動物を見かけるバドダラ市でも、見る機会は多くない。結婚式の馬車を曳く白馬がほとんどである。インドの結婚式はナゴヤ人もビックリの派手派手で、馬車も白や銀色に満艦飾のピッカピカである。前後に照明や飾りを持った隊列、楽隊が続く。



写真9 結婚式の馬車

2.8 ゾウ

一度だけ、結婚式の隊列に象が2頭いるのを見た。バドダラ王宮の正門はじめ各地の遺跡の彫刻には象



写真10 結婚式の隊列の象



写真11 ビシュラミトリ川を泳ぐヌマワニ

がたくさん彫られており、古い絵画にも王様が乗った象の戦闘場面がある。昔はたくさんいたのだろう。

2.9 ワニ

通勤の際いくつかの橋を渡る。夕方、帰り道、橋の欄干にたくさん人が並んで川面を見下ろしているのをよく見掛ける。そういえば、岐阜では夏、アユを見ている人を見かけたけれど、ここでは何を見ているのだろう？

運転手に聞くと、片言英語で、「ベビー・クロコダイル」だと言う。おいおい、街の真ん中を流れる川にワニがいる訳無いじゃないか、せいぜい大きいトカゲじゃないの？ 10年程前に住んだジャカルタでは、郊外アパートの脇を流れる川にミズオオトカゲがいた。思い込んだら頑な運転手、思い込みか単語が分からないからと思っていた。

市街の中心に大きな公園「サヤジ・バウグ」がある。道の向かいには100年ほど前、王様が建てた立派なドーム屋根の大学が広がっているから、この公園も王様が造ったのだろう。園内には王様のコレクションがいっぱい並んだ大きな博物館や動物園もある。園内を川が蛇行して流れている。立派な橋もある。橋から水面まで10mくらいあるだろうか。

公園内には野鳥も多いので、日曜の朝散歩がてら見に訪れることが多い。ある日、橋に差し掛かると、ここでも川面を指差して騒いでいる人たちに出くわした。釣られて覗くと、川端の木の下、濁った水面から眼と鼻だけ出したワニが見える。ヒヤッ、本物のワニ。大きい。4mは優にある。まさかこの脇の動物園から逃げ出したのではあるまい。

後日、ここに棲んでいるのはヌマワニ、体長5メートル、体重200～500kg、インド全土に生息と分かった。

その日、橋のすぐ下と20mほど下流を泳ぐ2匹を目撃した。この下流は会社帰りに渡る橋である。

運転手の言っていたのは本当だった。先入観はいけない。

そうこうして日曜日の朝公園に通っていると、70～80%の確率でワニを目撃することが分かってきた。ここに棲みついている。甲羅が60～70cmもある亀もいる。川岸では子供が竿も使わず釣りをしていたりする。反対側の崖下にはワニがいるというのに、モンスーン（雨季）の大雨で川の水嵩が増し、市街地の道路に出てきて救助されて川に戻された、という新聞記事も読んだ。市内の川に200～300頭ほど棲んでいるという。公園で話しかけてきた地元の人によれば、「35年間パローダ（バドダラ市の旧称）に住んでいるけれど、ワニの事故は2件だけ」だそうだ。



写真12 バドダラ市街 川ベリのヌマワニ

彼は危険が少ないことを指して言ったのだけれど、判断に悩むところだ。

街中にサルが出た、イノシシが出た、クマが出たと言っては大騒ぎをしている日本と比べると、この国の人々は野生生物と共生を当たり前としている。人への危害リスクはあっても宗教的に神聖な動物であったり、殺生を嫌うからなのだろう。

2.10 ヘビ

蛇はまだ数回しか見ていない。終業直前、運転手が外から窓を叩き、「蛇がダンスを踊っているから見に来い」という。工場のすぐ脇の畑である。くね

くねとお互いの体を絡ませ上半身(?)を立ち上げ、頭を左右上下させる。見るからにトランス状態である。延々30分近くも続いたろうか(こちらも付き合っている)。交尾中だったのだ。こちらの人にも珍しいようで、写真を撮りたいと何人にもせがまれた。



写真13 KCPL脇の畑で交尾するヘビ

2.11 サル

猿もたくさんいる。ハヌマンランゲールと言うオナガザルの仲間、手足はほっそりと長く顔や手足が黒、体毛は灰色、尻尾が長い。ヒンドゥー教の猿の神様ハヌマーンの使いである。



写真14 ハヌマンランゲールの小猿

聖獣なので餌を与える人もいる。人を怖がらない。仲良く毛繕いや子ザルが母親にしがみついている姿はやっぱり愛らしい。

明け方「ウオウッ、ウオウッ」と短く遠吠えのような声が聞こえる。気味の悪いジャングルの中といった感じの声だがこの猿の鳴き声だった。ボスザルは他の群れや外敵に対しては「ガッ、ガッ」とちょっと動物の声とは思えない、電気的なノイズのような声で威嚇する。

駐在員の住んでいるアパート周辺でも1週間から2週間周期で現れる。隣家の屋上を伝って群れで移動していく。群れを離れた個体も時折見かける。ア

パート前の道に出てくると、通りの角で野良犬が警戒する。やはり犬猿の仲らしい。一方、親猿は子猿を守り、尻尾を掴んで犬の方に行かせない。人の子供は大人が制している。皆、お互いの縄張りを守っている。



写真15 駐在員アパート隣家の屋上で寛ぐハヌマンランゲールの群れ

2.12 マングース

ずっとイタチの一種と思っていたが、調べてみるとマングースだった。尾が付け根から太くて長い。「サヤジ・バウグ」では毎回見掛ける。



写真16 立ち上って周囲を警戒するマングース

マングースというとハブvs.マングースの対決ショウ。そして沖縄や奄美大島でハブの駆除対策で導入したものの、蛇は食べずに家禽や野鳥・小動物を食べて増殖、生態系破壊の害獣として駆除されている厄介者のイメージが強い。ここは原産地、他の生物とうまく生物多様性を維持できているのだろうか。

2.13 ネコ

いろいろな動物を見る機会が多いバドグラ市だけれど、猫はほとんど見かけない。3年で10匹に満たない。以前工場の中にも痩せた猫がいたが、最近は見ない。

2.14 トカゲ、ヤモリ

トカゲは芝生や植え込みでチョロチョロしている。



写真17 モスク前の広場で獲物を狙うネコ



写真19 駐在員アパート天井のヤモリ

姿はカメレオンの様で、眼が左右別にグルグル動いたりする。色は枯れ草色で地味だ。もっともトカゲとカメレオンとの違いも良く知らないが、ヤモリは家の壁に張り付いているのは一緒である。私は結構可愛く見えて好きだ。

言った方が良いのかもしれない。小さい子供はウリ坊である。群れで泥浴びしていたりするのを見掛ける。



写真18 Copperpod (コウエンボク) に上ったトカゲ



写真20 泥浴びするウリ坊

今回の紙数が尽きた。次回は私の趣味のひとつである「鳥見」を取り上げたい。当地で見掛けた80数種類から、身近な鳥、印象深い鳥たちを紹介したい。

2.15 ブタ

街の周辺部で時々見かける。ノブタ、イノシシと

— 著 者 —



石川 照之

1982年入社。
KYB-Conmat Pvt. Ltd.
Director Finance and Accounting.
岐阜地区経理部門, PT. KAYABA
INDONESIA等を経て現職。